市民のWA

むさしの・多摩・ハバロフスク協会

長年にわたり、武蔵野市とハバロフスク市の交流を後押ししてきた、むさしの・多摩・ハバロフスク協会。2019年のラグビーワールドカップでロシア代表選手の合宿地になるなど、武蔵野市とロシアの関係は今も親密です。

理事長・安藤栄美さんと理事・山本誠一郎さん

野鳥観察をきっかけに両市の交流がスタート

ロシアのハバロフスク市と武蔵野市の交流は、昭和62年にハバロフスク市の「ピオネールの家」(日本の児童館に似た施設)の野鳥観察グループから、日本野鳥の会を通じて武蔵野市の野鳥教室に交流の提案があり、文通が始まったことがきっかけでした。その後、青少年がお互いの地を訪れる形で使節団派遣がスタート。平成4年には「青少年相互交流協定」を結び、武蔵野市の青少年を派遣し、ハバロフスク市の青少年を受け入れる隔年の事業になりました。「こうしたつながりを大人も巻き込んで発展させたいとの思いから、武蔵野市の外郭団体として平成8年に『むさしの・多摩・ハバロフスク協会』は設立されました。日本とハバロフスクを行き来する形で、自然体験や環境教育などを通じて両市の交流を続けています。初年度に参加した子が成長し、今は協会の運営にも協力してくれています。とても嬉しいことです」と同協会理事長の安藤栄美さんは語ります。

ハバロフスク地域での植林活動の様子。

植林は日露の市民が協力して行っている。

ロシアの学生と日本の大学生の交流をサポート。

緑の少年団でのカレー作りの様子。

ハバロフスクでの植林を活動の柱として継続

協会の設立当初から柱となっているのが、ハバロフスク地域での植林活動です。日本がロシアの木材を住宅などに大量に利用し始めたこともあり、地域の森林伐採が加速し、豊かな自然が損なわれることに。「日本が木材を利用してきた恩返しも理由の一つで現地での植林活動を開始しました。その活動も今年で20年を迎え、ハバロフスク市制160周年に合わせて160本の記念植樹を行いました。植林は100年事業。次の世代にもこの活動を受け継いでいきたいですね」と安藤さん。

植林活動から派生して、ハバロフスクの太平洋国立大学と武蔵野大学らの学生による環境に関する研究発表なども行われるようになり、活動の輪が広がっています。

NPO法人 むさしの・多摩・ハバロフスク協会

昭和62年から始まった武蔵野市とロシア・ハバロフスク市の交流が発展し、平成8年に設立。平成20年よりボランティアのみによる運営となり、翌年、NPO法人に。全国組織である「緑の少年団」の日露交流のコーディネートも行う。現在、役員13名、顧問7名で活動する。